

アルの住処は、オールドメモリアルセンターから車で十五分ほど離れた、二十四階建てのマンションの十八階になる。狭い部屋に、今年三十一歳になるエンバーマーの高塚暁と二人で暮らしている。共同生活というよりも、アルが居候をしているという言い方が正しい。なぜなら家賃など一円も払っていないからだ。

居候という立場上、筆筒の中の自分の陣地は十分の一ぐらいだし、ベッドはソファだ。けどこれで十分満足している。片田舎のと殺場、その近くにあった薄汚いボート小屋で、ただ無為に日々を過ごしていた頃に比べれば、今の方が遥かに人間らしい。

リビングのソファに腰掛けて黙々とご飯を食べる暁を、アルは向かい側からじっと見つめる。怒ったような顔をしていても、暁は男前だ。綺麗で整った顔をしている。切れ長の目に、高い鼻。彫りも深い。全体から受ける雰囲気は、オリエンタルでエキゾチックだ。黙って立っていたら俳優も顔負けじゃないかと思うけど、暁は自分の顔があまり好きではないようで「あきら かつこいい」と言っても、鬱陶しそうに唇をムッと引き結ぶ。

アルは自分が用意した食事を改めて見てみた。ご飯にみそ汁、レンジでチンした温野菜のサラダとオーソドックスな組み合わせだ。保守的な暁は、斬新なものを嫌う。色々と創意工夫を凝らしておかずを作っても「不味い！」と吐き捨てられる。アルが推測するに、暁は味覚が少々鈍いような気がする。なぜなら、自分が味見をする限りけっこう美味しいからだ。

まあ、今日のみそ汁は目を離している隙に噴きこぼれて、わかめも思いのほか柔らかくなってしまったけど、それは仕方ない。何より味はともよかった。アルとしては、失敗はあれど美味しくできたと自負している料理。ちよつとでも誉めてもらいたいのだけど、暁は機械のように黙々と口に運ぶだけで、一言も喋らない。

「あきら ごはんおいしい？」

たまりかねて自分から聞いてみる。

「不味い」

驚くほど即答だった。

「うそ おいしい あじみた」

アルがムッと唇を尖らせると、暁はお茶碗をバンッとローテーブルの上に置いた。

「野菜は半分しか火が通ってない。硬いから、噛んでるとジャリジャリしてムカッ腹が立つてくる。しかもみそ汁はわかめがドロドロに溶けて、ちよつとも旨みがない。お前、ダシを入れ忘れただろっ」

アルはスッと視線を逸らした。

「都合の悪い時だけそっぽ向くんじゃないっ」

「だしなくても おいしかった」

小さな声で抗議する。

「それに具のわかめを洗つてないだろ。こんな塩っ辛いみそ汁を飲ませて、俺を高血圧にするつもりか」

「ぼく まいにち がんばってる」

確かに二、三の間違いはあれど、やっているという努力だけは認めてほしい。

「お前が毎日料理をしているのは知っている。知ってるが、どうして毎日やって、似たような失敗を飽きもせずに繰り返すんだ？ 人は成長するモンだろう。それともお前の頭ん中はおが屑か」

「ぼくのあたま なかみある あきらしつてる」

「馬鹿野郎！」

ドーンと暁の落雷が落ちた。

「おが屑は物覚えの悪いお前の頭を例えたただけだ。いちいち説明させるなっ」

怒鳴つたあと、暁は癖のついた黒髪をぐしゃぐしゃに掻き回した。

「お前といい室井といい、最近俺の周りには何だかんだと口答えする奴らばかりだ」

吐き捨て、それでも暁は生焼けの野菜を口許に運んだ。

今年の三月、エンバードミング施設でアソシエイトエンバードマーとして研修していた紅一点の丸山まるやまが、めでたく研修期間を終えて卒業し、地元福岡のエンバードミング施設に就職した。

丸山は女の子の割に少々あらっぽかったけれど、アルをとでも可愛がってくれていたもので、別れは辛いものだった。涙ぐむ丸山につられて、ついついアルも泣いてしまった。

今、暁と同じ施設で働いている津野は丸山と同期で、研修期間を終えて卒業すると、そのままオールドメモリアルセンターにエンバードマーとして就職していた。津野の実家は葬祭会館で、津野のためにエンバードミング施設を造っているもののがまだ完成に至っていないということ、あと津野が「もう少し高塚さんのもとで勉強がしたい」と希望したようだった。

オールドメモリアルセンターのエンバードマーは基本二人だ。三人目は本来、定員オーバーになる。けれど今年の一月、もう一人のエンバードマー、小柳の妻が体調を崩した。仕事を休みがちになった小柳のフォローを、暁は文句一つ言うことなく淡々とこなしていたけれど、いくら手の速い暁でも日に何体も処置した上に、夜中も呼び出されるのはきつかったのか、疲れているような顔を見ることが多くなった。

幸い小柳の妻は二ヶ月もせずに回復したが、まだ病み上がりで無理はきかない。小柳は今でも時々休むことが多く、その辺も考慮して津野は一年契約で雇われたようだった。小柳がそんな状態なので、毎年二人、葬祭学校から受け入れていたアソシエイトエンバードマーも今年は一人、そして面倒を見るのは当然ながら暁だった。

今年やってきたアソシエイトエンバードマーは、室井郁いくみ己という二十三歳の青年だった。大学を卒業してから改めて葬祭学校に入学してきたらしい。津野と同じパターンだ。暁と同じぐらい背が高く、手足も細くて長い。暁が最初に室井の手を見た時に「器用そうだな」とぼつりと口にしたのがアルの印象に残って

いる。

暁の見立て通り、室井は指先がとても器用で、勘もいらしい。けど暁は陽気で明るく開けっぴるげな室井とどうも馬が合わないようだった。まあ……暁は誰ともニコニコと話をするタイプではないけれども、不味いと怒りながらも、暁は出した料理を全て平らげた。やっぱり美味しかったんじゃないんだろうかと疑問に思いつつ、アルは汚れた食器を洗い上げた。昨日の夜のうちに干してあった洗濯物を畳み、ソファで英語の雑誌を読んでいる暁の足許に正座して座った。

「……何だ」

暁が雑誌から視線を上げる。

「まっさーじ れんしゅうする」

暁はソファにござりと仰向けになった。アルはそんな暁の肩に触れ、ゆっくりマッサージをはじめた。アルは暁が誰もいない遅い時間に一人でエンバリーミングしている時、遺体のマッサージを手伝うことがある。マッサージは血管内で滞った血液が上手く排出されるよう、また固定液が全身に行き渡るよう必要な処置だ。資格を持ってないアルは本来、ご遺体の処置に関わることはできないけれど、特別にやらせてもらっている。これはご遺体に対する敬意であり、また感謝の気持ちでもあった。

最初のうちは、練習でも「力を入れすぎるな」「皮膚を擦るな」と文句を言っていた暁だけど、だんだんと自分の腕も熟練してきたのか、文句を言われなくなった。それどころか、気持ちいいのか暁はウトウトとはじめる。

暁の皮膚は、自分やご遺体と違って温かい。押し返す肌の弾力も、その奥に潜んでいる肉の感触も違う。生きている人なんだなと改めて思う。暁は途中でスウスイと完璧に眠り込んでいたけれど、全身のマッサージを終える頃にうっすらと目を開けた。

「はなし ある」

微妙に寝ぼけ眼の暁が、のろのろと半身を起こした。ふわっと欠伸をする。

「小遣いでも値上げしろっていうのか」

「おこづかいは いくつかげつ ごせんえんで いい」

清掃のアルバイトで収入があるとはいえ、日に二時間程度で月に換算すると四万円にも満たない。アルは全額を暁に渡し、その中から月五千円をお小遣いとしてもらっていた。暁は残りのお金を貯金してくれている。それが敷金、礼金、当座の生活費ぐらい貯まったら、アルは新しいアパートに引っ越すことになっていた。暁の家へ居候できるのは、お金が貯まるまでの間という約束だ。

「また変な服でも欲しいっていうのか」

先日、近くの店がかっこいい日本のTシャツを見つけた。どうしても欲しくて暁におねだりして買ってもらったばかりだ。自分と暁は体格がほぼ同じなので「あきらま きていいよ」と言っただけなのに、触ろうともしない。やっぱり人のものだと思っただけで遠慮しているのかもしれない。

「ぼく モデルを する」

暁は「はあっ？」と鼻に抜けるような相槌を打った。